

メディア・テクノロジーと延長作用

——身体と空間をめぐる諸言説——

松 本 健太郎

序 論

メディア論の嚆矢たるマクルーハンによると、「すべてのメディアは人間のいずれかの能力——心的または肉体的の延長である」と定義される（マクルーハン他 1995, 26）。たとえば電子メディアは知覚能力を拡張することによって、従来的には異なる状況に従属するとみなされていた視覚情報および聴覚情報を、われわれ自身が位置する物理的な時空へと現前させる。その結果、「情報システム」として規定されうる状況の融合と拡大とが惹起されることになるのである。

音声言語から書記言語へ、そして印刷言語から電子言語へ——このように覇権的なメディアが順次譲位されていくプロセスは、同時に、複雑化してゆく社会のなかで人間の思考と記憶のメカニズムが変容していくプロセスでもあった。それは本論考で詳述していくように、人間にとって“情報の外在化＝脱身体化”をともなうプロセスでもある。すなわち媒介テクノロジーが発達していく過程において、人間のコミュニケーションは次第に間接化・脱身体化され、しかも何らかの外部的な装置によって媒介されたものとなっていく傾向にあるのだ。

われわれ人類はその歴史上の歩みのなかで、コミュニケーションの補助手段として多種多様な人工物を作り出してきた。そのなかには言語コードのような非物質的な無形のものも含まれているだろうし、あるいは（粘土板からパソコンのモニターに至るまで）構造の複雑さにおいて様々な程度がありうるにせよ、物質的な形態を

とる有形のものも含まれているだろう。重要なことに、人類がこれまで経験してきた媒介形式の変容を一挙に通観しようとしたとき、上記の「外在化」、「脱身体化」、「装置化」は、コミュニケーション手段の発達とパラレルに進行する一連の流れを形作ることになるのだ。本論考ではメディア論的な言説をひろく渉獵しながら、メディア・テクノロジーの延長作用によって変容をつづける「身体」と「空間」の関係性を考察の俎上に載せたい。

1. 情報の外在化＝脱身体化

レジス・ドブレは『一般メディアロジー講義』において、人間を「人工補綴具をつけた神」（ドブレ 2001, 89）として位置づけている。彼によると、人間は歴史上「様々な装置へと外在化を進めてきた」のであり、それによって超越的な力を獲得したというのである。このような言説は、メディア論においては珍しくはない。たとえば室井尚・吉岡洋もまた、外部的な装置との関係性のなかで人間の文明が構築されてきた歴史的なプロセスを、以下のように整理している。

問題は遺伝子による生物内部の情報処理機構の「外部」に、もうひとつの「記憶装置」を作り出そうという意志＝力ではないだろうか。つまり、脊椎動物の情報処理センターが脳であるとする、人間は脳の「外部」に別な情報処理装置を作ろうとしてきた。それが人間の文化であり、その情報処理装置の巨大システムが文明であると考えることができるのではないだろうか。このような「外部」の情報処理装置、あるいは記憶装置（データベース）の最初のは言語であつたろうし、意図的に作られた道具や埋葬などの儀式であつたろう。あるいは、岩壁に刻まれた線刻画や模様、入れ墨や化粧もそうだったろう。そして、神話によってそれらの情報はシステムとして統合される。さらに、それらの神話は別な神話と戦い、合流し、組織化され、神話共同体としての古代国家へと生成していく。文明の誕生とはこのような過程だったのではないだろう

か（室井・吉岡 1993, 146-147）。

ここで主張される内容は、先のマクルーハンのメディア観との関連において理解することができよう。室井・吉岡は外部化された「記憶装置」として様々なものを例示しているが、そのなかには言語や道具も含まれるし、あるいは視覚的形象や葬礼など、文化的なコードに裏付けられたものも含まれている。それはメディア史上の諸段階を通じて徐々に、しかも複雑に織り上がっていったわけだが、その過程で認められる「外在化」「脱身体化」「装置化」などの諸傾向は、われわれの身体図式を、さらには人間と世界との関わり方を大きく変えていったのではあるまいか。

人間を人間として構成する要因であり、また人間特有のコミュニケーション手段としては最古のものといえる音声言語は、肉声を送り出す話者の身体的な運動に依存している。これに対して書記言語の場合には、書くという行為の具体的実践によって視覚的痕跡が形成されるとしても、発声器官を介した音声化という身体的な労苦が課せられることはない。しかも一旦文字を書いてしまえば、情報の保存という目的はある程度の永続性をもって達成されたも同然である——当該情報を思い出したければ、人はそれが書かれた紙面に目を移せばよいのである。しかし音声言語の場合にはそうはいかず、情報を（個人的なレベルで、また集団的なレベルで）保存していくためには、口伝と記憶のための相当の努力が払われねばならない。だが印刷術が開発されてからは、文字を視覚的なイメージとして刻印する最小限の行為すらも、外的な機械装置によって（たとえ、それが全面的ではないにせよ）代理され、半自動化されていくことになる——この問題は、人間のコミュニケーションを肩代わりする外部メカニズムの発達という観点から再検討されねばならないだろう。ところで、メディア発達史において見出せる顕著な傾向について言えば、水野博介による次のような叙述が参考になるのではないだろうか。

歴史的には、コミュニケーションは、「メディア」としての「人的ネットワーク」を介するものから、紙に代表されるような物理的な「インターフェイス」

や機械的な「装置」を介するものへと移行してきたと言えよう。しかしながら、その装置としてのメディアの性能そのものは、人間とは異質な文字・活字メディアから、聴覚メディア、視聴覚メディア、そしてマルチメディアへと、次第により人間に近いものになってきている。これは、要するに、使用する感覚モードや情報リッチネスの問題である（水野 1998, 28-29）。

この引用で示されるのは、メディアが人間の諸感官をカバーすべく多感覚化していく過程であるが、それは同時に、媒介手段となる装置が複雑化していく過程、いわば「装置化」の過程でもある。たとえば言語的なメッセージを構成する手段の発達を、仮に「口頭」→「筆記用具」→「印刷機」→「ワード・プロセッサ」といった移行プロセスとして想像してみよう。これらの補助装置の高度化は、情報の外在化＝脱身体化をますます促進させ、なおかつ、人間のコミュニケーションを間接化させていく契機をもたらしたと考えることができる。デイヴィッド・クローリーとポール・ヘイヤーの編集による『歴史のなかのコミュニケーション——メディア革命の社会文化史』では、人類にとって話し言葉や非言語的な身振りが主要なコミュニケーション手段であったおよそ 10 万年前の段階から、世界が次第に複雑化の様相を呈するにつれ、ますます身体外的な記憶システムを発達させる必要性が生じたと解説されている。そして「コミュニケーションの増加は、コミュニケーション活動、つまり増大する情報量を貯え、とり出すためのメディアの発展を導いた。今日のマイクロチップはこのようなメディアの一つであり、私たちが想像する、刻みのつけられた棒の直系の子孫にあたる」と言われているのだ——ここでは「刻みのつけられた棒」と「マイクロチップ」が同じ系列のなかに、すなわち、同じ外部記憶装置の系譜の中に配置されている（クローリー他編 1995, 10-11）。

人類史上、最も原初的なコミュニケーション状況を想定するならば、人と人とのやりとりは身体の位置によって中心化され、しかも「今ここ」的な時空に制限された対面的なもの、また、身体的な動作をともなった口頭的なものが主流であったはずである——つまり当時は身体的な能力を代替するコミュニケーション手段が未発

達であったと推測されるのだ。そのような原初的なコミュニケーションの現場において、身体との近接性が重要な諸感覚、たとえば触覚や味覚、また嗅覚や聴覚は、現代人のものとは全く異なる意義を帯びていたことだろう。だが、これに対して多様なメディア装置が考案された現代においても、この「身体」があらゆるコミュニケーションの基礎にあることは不変の事実であると言える。キャロリン・マーヴィンは、いかなる文化においても「身体とは、人間の経験における知覚の中心であるばかりか、すべてのコミュニケーションの様式のなかで最も身近なものである」と語っている（マーヴィン 2003, 217）。また L・K・フランクなどは「触覚はおそらくもっとも原初的な感覚過程である」と主張し、触覚的コミュニケーションの身体的な次元について分析の眼差しを向けている（フランク 2003, 188）。さらに トゥアンは「触覚は五感の中で最も基本的な感覚である」と指摘し、「目は閉じることができ、耳はふさぐことができ、時にはかいだり味わったりできないこともあるが、しかし触覚だけはつねに機能している」と主張している（トゥアン 1993, 165）。このように触覚に重きを置く論者がいるなかで、オングはコミュニケーションを基礎づける聴覚的な要素の重要性を説いている。彼は「言語は基本的には声に依存するものだということは、いつの時代にも変わらない」と述べ、あらゆる言語表現の基礎に発声行為があることを指摘している（オング 1991, 24）。ともかく、これらの論者の見解では、触覚が注目されるにせよ、あるいは聴覚が注目されるにせよ、あらゆるコミュニケーションの基点として知覚する身体が重視されていると言えるだろう。それは現代においても不変の事実であり、当然、身体なくしては書き言葉や印刷物、あるいは電子メディアなども成立しえないし、意味をなさないものである。

ただし人間の場合、その身体は、自らの手が外部に作り出した様々な情報処理機構へと繋がれてもいるのだ。その最も古くから存在するものが「言語」なのである。マクルーハンによれば、言語とは「情報検索の道具」であり、しかも、それは「経験を音声化つまり外在化した感覚に移し変える」ものである（マクルーハン 1987, 60）。すなわち話し言葉は、人々の直接的な感覚経験を音声記号へと置換する基本

的な「外化の技術」なのだ。もちろん人間は有史以降も、その社会的な諸関係の複雑化に対応するため、また外的環境を制御するために、媒介テクノロジーを革新していく必要があった。そのため、今度は音声記号を視覚記号へと再変換する必要性に迫られたのである。それは、さらなる外化技術——文字メディア——の発達へと結実していった。実際、文字メディアや、その後の活字メディアの発明といった技術革新は、人間の従来的な情報システムを一変させるだけの影響力をもっていたといえよう。視覚的に統制されたスペースに言語情報を刻印する文字テクノロジーによって、人々は同じメッセージを何度も繰り返し言う必要がなくなり、記憶の労苦から解放され、より自由な思考が可能となったのである。さらに活字の発明は、テキストの量産化と画一化とを可能にし、情報の脱身体化という流れに拍車をかけたといえる。ともあれ、オングは書くことを「非人間的」と評しているが、それは「精神のなかにしかありえないものを、精神のそとにうちたてようとする」からである——そして彼は、この外化の技術の後継的メディアとしてコンピュータを挙げるのである（オング 1991, 168）。つまるところ印刷機や電子機器などの「装置」の開発は、文字の発明とは切り離された事態としてではなく、むしろ情報の外在化＝脱身体化が進行するプロセスの延長線上に位置づけうるものである。このような観点によると、たしかにグーテンベルクの発明なども、それまで人々が依拠していた情報保存のシステムに変更を加え、情報の外在化＝脱身体化を大いに進展させる契機であったといえよう。吉見俊哉の指摘によれば、その発明以前において「知識を時間を超えて保存しようとするならば、その伝達を選ばれた人の間だけの秘伝として閉ざしておく必要があった」という——すなわち「〔それまで〕知識の公開は、そのままテキストの散逸と記録の損傷、誤写や変形を伴ったのである」が、しかし「〔印刷術の発明は、〕 定着した記録の継続的な蓄積を、その公開化と並行して達成することを可能にした」のである（吉見 1994, 84）。量産が可能となり、モノとして商品化された印刷物は、情報の安定的・継続的な保存と積極的な共有とを促進させたと言えよう——このことが人間に新たな可能性を付加する“延長作用”として効力を発揮したことは間違いない。いずれにせよ、以上のようなメディア史的な

流れからは、身体的な営為を何らかの装置によって置き換えていこうとする人間の、いってみれば“外化に対する熱情”を感知することができるだろう。

ここで無視することができないのは、そのような技術革新の背景に、記録用の物理的支持体を作成するテクノロジーの発達が必須であったということである。たとえば書記言語の発明によって、文字を刻みつけるのに適した物理的媒体——粘土板、石版、パーチメント（羊皮紙）、パピルスなど——が必要とされるようになったのである。エリック・ハヴロックによると「ギリシャは、石や焼き固められた粘土がアルファベットの使用についてのもっとも古い証拠を提供しているところ」とされるが、現代人が大量消費する紙のように、当時の人々にとって気軽に書きつづせる「表面」が入手されたのは、パーチメントと呼ばれる動物の皮が最初のものであったと言われている（ハヴロック 1995, 70）。だが「皮紙の場合には、脂身と毛をそぎおとしたあと、何度も軽石でみがき、白墨で白く塗らなければならず、また、まえに書かれていたテキストをこすり落として再加工することもしばしばあった」と説明されるように、当時の筆記行為が相当の準備を要するものであったことが窺える（オング 1991, 196）。他方、当時の筆記用具類は、現在のもの——機械づくりの紙やボールペンなど——と比べて非常に扱いにくいものであった。書くための道具としては鉄筆、ガチョウの羽、毛筆などが使用されていたが、それらは現代の筆記用具と比べて手入れが必要であったり、また熟練技術が必要であったりしたため、書くという行為は物理的にも容易なものではなかったのである（ibid., 197）。

書くことをめぐる初期的な状況と比較したとき、中国からの製紙技術の伝来は、メディア史上のターニング・ポイントとなる重要な技術移転であったといえよう。ジェイムズ・バークは紙がもたらされた経緯について次のように説明している。

リテラシーにたいする最大の希求は、突然のように紙が利用可能になったことで生じた。紙は元は中国で発明されたが、8世紀にアラブ人がサマルカンドを侵略したとき、その地で見つけた。捕虜になった中国の紙職人がサマルカンドに送られて、製紙工場をつくらされたのである（バーク 1995, 101-102）。

もともと紙は中国で紀元前2世紀には作られていたが、ヨーロッパでの生産が開始されたのは12世紀になってからのことであったと言われている。伝来後に製紙技術は改良され、14世紀の末には紙の値段がボローニャで5分の1にまで下落したという。紙はパーチメントより安価であったが、一部の人々はその耐久性を危ぶんで使用に反対していた、とバークは付記している。いずれにしても、製紙技術の伝来は人々に多大なメリットをもたらした。情報を紙に記録する場合、当然のことだが、それは人間の限られた記憶に対して補助的な機能を果たすことになる。さらに、その紙を遠隔地にいる他者へと送信する場合、それは対面的な状況を超えた情報の流通を実現することになる。人間の身体的な営為を補完する記録行為および伝達行為は、このような基礎的な素材があつてはじめて可能となったのだ。

それでは印刷機のような複合的な装置の発明については、どのように捉えることができるのだろうか——ここでハロルド・イニスの見解を参考にしてみよう。マクルーハンの解説によると、イニスは印刷を「われわれ自身をふくめて他のあらゆる資源をどのように開発すべきかの見本を示したあたらしい天然資源」として理解したと言われている（マクルーハン 1986, 252）。イニスは「基本材もしくは、天然資源としての伝達媒体を研究すること」を重要なテーマとして設定していたが、その思想が成熟期を迎えたとき、彼は「書字、紙、ラジオ、写真製版といった技術的メディア媒体も、それ自体で富であるという発見」に到達したという。新聞やラジオやテレビなど、装置とコンテンツの両面で複雑な制作プロセスが関与するメディアを考えるならば、そこで紙や音波や電波などの基本材は、印刷機や電子機器などの複合的な装置を運用するための下位メディアとして組み込まれている。つまり複雑化したメディアはさまざまな基本材＝天然資源を多元的なルーツとして取り込んでいるのだが、イニスの視点によると、「書字、紙、ラジオ、写真製版」など、人間が加工した技術集約型のメディアも新たな天然資源の如きものとして、さらなる上位メディアに組み込まれて機能する「富」として解することが可能なのである。この彼の見方は、テクノロジーの集約度を基準として、「基本材＝天然資源」から「書字、

紙、ラジオ、写真製版」に至るまでの“装置化”の道筋を連続的に通観するための視界を拓いてくれる。ともかくグーテンベルク印刷術の発明による活字文化や、あるいはワープロなどの発明による電子文化の段階に突入して以後も、人間の能力が「装置」によって置換され、コミュニケーションが複雑な人工物によって媒介される傾向は総じて顕著なものとなっていく。

2. メディアの人間化／非人間化

現代へと至るにつれ、メディアの媒介作用をとりまく状況はますます錯綜を極めていくのだが、このような「装置化」の代表的な事例として、われわれは19世紀前半に発明された写真を取り上げることができるだろう。ヴィレム・フルッサーは写真の哲学を構想するなかで、写真こそが最初の〈テクノ画像〉——つまり、彼の定義によれば何らかの装置によって作成された画像——であると主張し、その歴史的な意義を強調している。1839年、フランスでルイ＝ジャック＝マンデ・ダゲールが、そしてイギリスでウィリアム・ヘンリー・フォックス・トールボットがそれぞれの発明を公にしたことによって、写真は外界の物理的なイメージを精確かつ機械的に模写しうる画期的な光学装置として誕生することになった。このことから、たとえばロラン・バルトなどは、写真のみが人為的な「変換」によらずとも現実像を復元する装置としてそれを重視するのだ。つまり写真は、カメラという光学装置によって視覚的なイメージを自動的に作成し、その表象化のプロセスを脱身体化する点において特殊な媒質として誕生したのである。他方で、それは鑑賞者にとっても、その能力を代替する機能を果たす。たとえば家族の集合写真などは、すでに亡くなった構成員の外貌的な印象さえも細部にわたって鮮明に再現することができる。そのとき写真のリアリティは、人間の記憶力の限界、すなわち“忘却”という身体的なリミットに抵抗し、そのリスクを回避するための手段となりうるのだ。むしろ、写真術は記憶を外部化するという補完機能において書記テクノロジーの延長に位置するが、あくまでも装置化されたメディアを介して表象を構成する点、そして表象

が因襲的ではなく自然的と言われる記号類型に依拠している点において、書き言葉とは本質的に異なっているのだという見方もできよう。

書記言語がそれを書き付けるための紙を必要とするように、写真はそれを焼きつけるための印画紙を必要とする。だが、基体的なメディアとしての紙と比べて、写真はさらに高度な技術の結集によって産出された印画紙の表面に映像を定着させるのである——この点でも、19世紀の発明品である写真には、複雑なテクノロジーが詰め込まれていると言えるだろう。たとえばカロタイプは、その後に発明されたアルビュメン・プリント（1850年にルイ＝デジレ・ブランカール＝エヴラールによって発明された鶏卵紙）およびコロジオン湿板法で作成されたネガ（1851年にイギリスのフレデリック・スコット・アーチャーによって発明されたもの）と併用され、膨大な数量の作品を世に生みだしていったのである。

テクノロジーの集約化傾向は、視覚像があらわされる印画紙だけでなく、視覚像をあらわすカメラという装置自体についても確認される。トールボットは映像を自動的に形成する写真術について、それを「自然の鉛筆」the pencil of nature という隠喩で表現していたが、カメラは実際の鉛筆などとは比べものにならないくらい、はるかに高度な技術から形成されている。いずれにしても、カメラに限らずメディア全般に関して言えることであろうが、装置が複雑なものとなればなるほど、人々がその内的なメカニズムの全容を熟知することはますます困難になる。とりわけ今日では、たとえばテクノロジーが高度に集約されたデジタル・カメラの内的機構などは、一般のユーザーにとっては不可知な“ブラック・ボックス”の如きものと化している。だが内的機構に対する無知は、当該装置の円滑なる操作を必ずしも妨げるものではない。というよりも、概して、一般的なユーザーは操作に必要とされる知識以上のものを積極的に求めようとはせず、自らがもつ映像化の欲望をカメラの複雑な機構へと託しがちである。写真が絵画のオルタナティブ・メディアとして広範な層の愛好家を獲得することができたのは、絵画と比べてイメージの作成、および、その学習に要する身体的負担が軽微であるという事実が一因になっていると推察される。ピエール・ブルデューが写真愛好家の一般的な願望について言及するよ

うに、写真愛好家にとって「写真機が自分の代りに、可能な限りより多く操作してくれることを求めたりする」ことは全く不思議なことではないのだ（ブルデュー他 1990, 8）。

ところで先に触れたが、水野はメディア装置の発達に言及するなかで、「人間とは異質な文字・活字メディアから、聴覚メディア、視聴覚メディア、そしてマルチメディアへと、次第により人間に近いものになってきている」と指摘していた。この方向性を“メディアの人間化”として捉えることは、“身体的な行為の代替”がメディア装置の究極的な目標であると仮定するならば、的外れとは言えないだろう。人間の身体は、人間の身体に似た外部装置によって取って代わられていくのだ。実際、メディアが人間の身体的な機能を接収していく過程で、その装置は人間にそなわる多感覚性を全面的にカバーしうるものへと変態しつつある。なかでも視聴覚メディアへ、そしてマルチメディアへという現代的な進化は、メディアが人間の感官を全面的に属領化していくプロセスであるとさえ認識することもできるだろう。もちろん、この移行現象をマクルーハンの「解放」ととるか、あるいは、メディアが人間を征服する「植民地化」ととるかは意見が分かれるところかもしれない。だが確実なのは、電子時代の人間が全感覚性を取り戻すとしても、それは必然的に、人工的なメディア環境内での擬似的な出来事にならざるをえないということである。この理由から、オングの慧眼は“メディアの非人間化”という事態へと向けられていたのである。

マクルーハン理論では、口承文化的な感覚比率を復活させるのは電子メディアの媒介作用であり、その身体補正機能であると考えられている。逆に言えば、文字文化・活字文化の到来によって奪われた全感覚的なコミュニケーションは、電子メディアによる感覚比率の再調整を抜きに復活させることは困難なのである。当然のことだが、口承時代の全感覚性は電子時代のそれとは本質的に異なる。というのも電子時代のコミュニケーションは、もはや口承時代のように直接的・対面的なものではなく、あくまでも装置によって媒介された人工的なものだからである。そこで人間に与えられる環境は、あくまでも電子的な装置によって表象された擬似的なもの

に他ならない。オン・グは外化の技術たる書記行為を「非人間的」と評し、コンピュータという電子メディアをその末裔に位置づけている。ただし現代的なメディア環境をそのように語るのはオン・グだけではない。ヴィレム・フルッサーも「われわれのコミュニケーション状況が〈非人間的〉になった」と批評しながら、その理由を「装置」の機能と、装置の「オペレーター」の機能とが融合しつつあることに求めている（フルッサー 1997, 192）。新たな時代において、人間は複雑な外部装置へと連結されてはじめて“媒介された世界”と間接的に対峙することができる。そう考えるならば、オン・グやフルッサーが書記行為を非人間的と称したり、あるいは装置化を非人間的と称したりする背景には、諸々のメディア装置の媒介作用が情報の脱身体化を促し、人間を世界との直接的・無媒介的な接触から疎外するものだと確信があったのではないだろうか。本節で取り上げた「装置化」というメディア史的な傾向性は、なんらかの手段によって身体に加わる負担を低減させ、その結果として人間と世界との関係を乖離させる「メディアの非人間化」と共振するものであるのだ。

3. メイロウィッツによるゴフマン理論の応用

これまで本稿では、「外化の技術」による人間拡張をおもな考察の題材としてきた。ただ、ここで注意すべきなのは、しばしばメディア論では「身体の拡張」が「空間の拡張」と連動するものとして語られることがある点である。以下、ウィリアム・J・ミッチェルが『サイボーグ化する私とネットワーク化する世界』のなかで展開する次のような主張に目を向けてみよう。

私の筋肉と骨格のシステム、生理的なシステム、神経のシステムは、入れ子になった境界と分岐したネットワークの巨大な構造の中に組み込まれ、人工的に増強、拡張されている。私の到達範囲は無限に広がり、似たように拡張された他人の到達範囲と相互作用して、移動、作動、知覚、制御の世界的システムを

作り出している。私の生物学的身体は都市と噛み合う。都市それ自体が私のネットワーク化した認識システムの一領域になっているだけでなく、それにもまして、そのシステムの空間的・物質的な具体的表現になっているのである（ミッチェル 2006, 35-36）。

ミッチェルが指摘するように、人間の生物学的身体は都市空間とネットワークによって接続されている。すなわち現代における人間拡張のメカニズムは、身体と空間との関係性、あるいは両者のネットワークによる媒介性を勘案して考察される必要があるのだ。

現代における空間意識の変容の問題を考えると、ここで導入しておきたいのはジョシュア・メイロウィッツの言説である。彼はその刺激的な著書、『場所感の喪失——電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』のなかで、アーヴィン・ゴフマンとマーシャル・マクルーハンの両理論に相互補完的な役割を任じながら、電子メディアがもたらした時空意識の変容を把握しようとしている。そもそもゴフマンが着眼したのは、人々の対面的なコミュニケーションがなされる固定的な環境であり、他方でマクルーハンが着眼したのは、メディアを介してコミュニケーションがなされる流動的な環境であった。メイロウィッツは、ゴフマン理論およびマクルーハン理論に関して、双方の意義と限界とを同時に認めながらも、両者の公分母として示される「状況」*situation* という概念によってメディアの働きを理解しようと努めたのである。

ゴフマンの基本的な思想においては、第一に、人間は演劇的な存在とみなされ、第二に、個々の人間の相互行為は二人以上が直接的に居合わせる空間的環境の全体において展開されることになる、と捉えられる。そして彼は、この空間的環境の全体を「状況」と呼ぶのである。正確に言えば、その「状況」のより物理的に限定された概念が「劇場」であり、それは一つの建物、あるいは施設のように物理的境界をもった空間的環境として示されることになる（ゴフマン 1974, iii）。彼によると、個々の人間は日常生活の中で、さまざまな「状況」あるいは「劇場」において、そ

の場で期待されている役割を演じる「パフォーマー」であると同時に、その場に同席し他の人々が演じるさまざまな役回りに呼応していく「オーディエンス」でもあるという。パフォーマー／オーディエンスとなる人間は、さまざまな状況に関連した役割を演じ、またそれに呼応する過程の中で、その「状況」の規定性に左右されながら立ち振る舞うことになる。ゴフマンはこの場合の行為基準を「状況の定義」*definition of situation* と呼び、パフォーマーとオーディエンスの相互行為の成立が「状況の定義」の共有を前提とすることを指摘している。ともかくゴフマン理論において、ある状況における「人間身体間の行為は、空間と時間に関して画定された社会的行為である」と言えるのである（椎野 1991, 35）。

ゴフマンをはじめとする社会学者の多くにとって、「ある社会の諸社会的状況は相対的に安定的だ」と考えられていたが、メイロウィッツの理論は「静態的状況の研究を、変化する状況の研究へと拡張するものであり、物理的に定義づけられるセッティングの分析をコミュニケーション・メディアによって作りだされる社会的環境の分析へと拡張するものである」と考えられている（メイロウィッツ 2003, 8）。要するにメイロウィッツは、諸個人が占有する状況を流動化させる要因として「メディア」を把握したのである。彼はメディウム論的な観点に立脚しながら、「電子メディアのメッセージの力による影響ではなく、人々が相互行為する社会的セッティングを電子メディアが再組織化することによる影響、また、物理的場所と社会的『場所』とのかつて強かった関係を電子メディアが弱めることによる影響」を記述しようと試みたのである（*ibid.*, 9）。

以上が示すように、メイロウィッツはゴフマン的な「状況」概念を拡張的に適用している。その際、彼はゴフマンの言及する「知覚の障壁」という表現に着目し、それを根拠として「状況」概念を「情報フローのパターン」という観点から規定し直すのだ（*ibid.*, 82-83）。水野博介によると、もともとの「状況」概念とは「視覚および／または聴覚情報を妨げることのない範囲の物理的に区切られた空間であり、もともと『情報』が関係しているのであって、それをメイロウィッツが洞察した」と解説されている（水野 1998, 50）。ともかく、このメイロウィッツによる

「状況」概念の再定義からは、もはや「知覚の障壁」を生み出す物理的なセッティングではなく、むしろ「知覚の障壁」を規定する情報フローのパターンこそが重要なのだという洞察が見え隠れしている——つまり“物理的な境界”ではなく、むしろ“情報的な境界”こそが問題なのである。メイロウィッツは、この情報論的転回によって、ある物理的な時空の共有を前提とする対面的なコミュニケーションのみならず、時空を越えたメディア・コミュニケーションを、既存の「状況」概念の拡張された射程において分析することを可能にしたのである。

ところでメイロウィッツは、メディアが創出する新たな時空について、それを「第三の状況」という表現をもちいて説明している。対面的なコミュニケーションが第一の状況を生み出すとするならば、メディア・コミュニケーションが生み出す第二の状況の介入は、二つの異なる時空を非加算的なかたちで接合することになる。たとえば職場から家庭へと電話がかけられるとき、二つの異なる社会的領域が（一時的・限定的であるにせよ）聴覚的に融合され、新たな第三の状況として「職場＋家庭」が発生する、とメイロウィッツは考えたのである。この例からも、まさに「電子メディアは、物理的に境界づけられたセッティングに生じる状況にいよいよ侵入してきている」と言えるわけである（メイロウィッツ 2003, 34）。

ところで、ポール・ヴィリリオはメイロウィッツとは別のかたちで「状況の融合」の問題に着目しているが、彼は電子メディアによる距離の喪失が（コミュニケーションに参加する）人々の自己イメージを変質させると説いている。

かつて居合わせるという言葉は、物理的に他者と顔をつき合わせるほど近くに存在することを指していた。そのような場では、声や視線の届く範囲でしか会話ができない。しかし話し手同士を電磁場で直接結びつけるメディアは、遠く離れたものの間に近接性を生み出し、突然距離を消滅させてしまう。遠く離れた話し手同士が、今ここに「実存」するようになるのだ。こうして人は従来の活動の他に、「遠隔活動」——すなわち距離を隔てたまま見て、聞いて、話し、触れ、臭いを感じる——ができるようになり、突然、主体人格の二重化と

いう今まで経験したこともない可能性を手に入れることになる。このように二重人格化した主体は、もはや自らの「肉体イメージ」を今までと同じように受け入れはしないだろう（ヴィリリオ 2002, 149）。

かつては遠隔地にいるがゆえに交信不可能であったはずの他者が、電子メディアを通じて「今ここ」的時空に召喚される。 $\dot{\text{そ}}\dot{\text{こ}}\dot{\text{に}}\dot{\text{い}}\dot{\text{る}}$ という事態と、メディアによって $\dot{\text{こ}}\dot{\text{こ}}\dot{\text{に}}\dot{\text{あ}}\dot{\text{ら}}\dot{\text{わ}}\dot{\text{れ}}\dot{\text{る}}$ という事態とが引き裂かれ、ヴィリリオの語る主体人格の二重化は成り立つのである——「もはや重みを持つ物体の馴染み深い知覚は、今までとは違い、それが物体であることを証明するものとはならない」のだ。そのような感覚は、むしろ、われわれの自己イメージをも確実に変質させていると言えるだろう。

他方でメイロウィッツも、電子メディアによるアイデンティティの変容が集団的なレベルで発生するものと予測していた。

電子メディアは、物理的位置取りと社会的状況との伝統的つながりを断ち切ることによって、場所によって定義された集団から人々が情報的に「逃げ出す」ことを可能にし、また、多くの集団テリトリーを部外者たちがけっしてそれらに入らずに「侵略する」ことを可能にして、以前は別個だった集団的アイデンティティを不鮮明なものにし始めるかもしれない（メイロウィッツ 2003, 121-122）。

電子メディアは、対面的な相互行為の状況性を揺るがすだけではなく、人々の住まう情報世界、ひいては人々のアイデンティティそのものをも動揺させるのである。メイロウィッツは「状況」を「社会的情報に対するある所与のアクセス・パターン」としても規定していたが（ibid., 84）、電子メディアによる状況融合の帰結として、人々の情報に対するアクセシビリティは劇的に変化し、それによって既存の集団的アイデンティティは再構造化の機会を獲得することになったのである——メイロウィッツは、このことを印刷メディアと電子メディアとの対比において論じて

いる (ibid., 31-32)。

印刷文化においては、識字率の向上と出版物の普及は、活字情報に対する異なる読解技能レベルや、異なる訓練と関心のレベルとを形成し、それによって社会構造の細分化がもたらされていた。そのような時代、人々は思想・趣味・教養・性別・職業・年齢層などの相違によって、それぞれ異なるテキストへとアクセスし、その結果として、人々は相互に異なる情報世界へと分割されることになっていた。このように人々を異なる状況へと分離することは、結果として異なる世界観を育み、さらには異なる社会的アイデンティティを産出していったのである。だが、メイロウィッツによると「電子メディアは〔活字メディアとは対照的に〕、多くの異なるタイプの人々を同じ『場所』に連れ込むことによって、以前は別個だった多くの社会的役割の違いをますますぼやけたものにしていった」と論じられている。要するに、印刷物に対する「所与のアクセス・パターン」が複数の集団の相互隔壁をソリッドなものにしていたとするならば、電子メディアは逆にそれを溶解させ、集団的なアイデンティティの再編を可能にする文化的な土壌を醸成していったのである。

ところでメイロウィッツは、電子メディアによる状況の融合という事態を「状況地理学」の変化として表現している (ibid., 32)。また水野は、その同じ事態を「〔状況の〕ボーダーレス化」として表現している (水野 1998, 50)。彼らは空間的なメタファーを使用して「状況」を把握しようと努めているが、電子メディアが社会的な状況空間を流動化させるきっかけとなったことは確かであろう。だが状況融合という現象は、なにも電子的メディアに限って発生する現象ではない。たとえばパピルスのような非電子的・基体的なメディアも遠隔的なコミュニケーションを可能にするし、したがって異なった二つの状況を融合するための潜勢力をもちうると言える。デイビッド・リースマンの記述によると、「前文字期にある人びとの地理的移住は、鹿の群れの不可解な移動となにか共通するところがあるが、地理的発見の時代の書物読者は、地理的な移動の経験に精神的に準備できていたといえる。読者は実際にはそれほど見知らぬ遠い人びとのところまで出かけたりしたわけではないにしても、想像において少なくとも故郷を遠く離れていた」と言われている (リ

ースマン 2003, 277)。つまり書物による地理的情報の受容は、当然、実際の旅行による地理的空間の認知とは本質的に異なる体験であるにせよ、少なからず、その読者の想像力に訴えかけ、遠隔的な状況を仮想的に受容させることを可能にならしめたのである。

4. メディアの延長作用による空間意識のひろがり

コミュニケーション・メディアの革新は従来の情報フローの在り方に変更を加えることで、物理的なセッティングによって境界づけられた既定の状況編成を解体することができる。この場合に重要なことは、メディアによる状況の再編という事態が、行為者の知覚範囲という狭隘な領域でのみで発生する事態ではないということである。ハロルド・イニスは、あるメディアが広範囲にわたって流通するものである場合、それが国家レベルで政治システムを組み換える原動力になると考えていた——そのような視点に立てば、たとえば「エジプト文明における専制君主政体からより民主的な機構への移行にともなう激しい動乱は、コミュニケーションのメディアとしての、またピラミッドに見られるような威信の基盤としての石の重視からパピルス重視への移行と時期を同じくして起こった」と説明されるように、メディア革新と国家体制との関係すらも見えてくるのである（イニス 1995, 31）。ここでは、より巨視的に、あるメディアが大規模な集団の状況性に与える影響が分析されているのだ。

イニスの理論のなかでも、とりわけメディア・バイアス論は有名である。そこでは特定のメディアが時間的に長く維持されるか、あるいは空間的にひろく拡散するかといった質の違いを基準として、時間バイアスをもつメディアと空間バイアスをもつメディアとが分類されている——「その性格によって、もし、あるメディウムがとくに重く長持ちするものであり、また運搬に適していないとするならば、おそらく、それは空間よりも時間を超えた知識の散布により適しているのだろうし、また、もし、ほかのメディウムがとくに軽く簡単に運べるとするならば、おそらく

く、それは時間よりも空間を超えた知識の散布により適しているのだろう」(Innis 1991, 33)。このうち前者は社会を安定化させ、中央集権的な国民国家システムを生み出すメディアであり、他方、後者は社会を不安定化させ、地方分権的な帝国システムを生み出すメディアであるとも分析されている。そう考えるならば、パピルスなどは持ち運びに便利であり、情報の可動性を高めることから、空間バイアスをもつメディアとして分類されると言えるだろう。あるいはベネディクト・アンダーソンは、新聞を「一日だけのベストセラー」(アンダーソン 1997, 61-62)と表現していたが、広い範囲で流通するものでありながら、一日たてば古紙になってしまうこのメディアは、極端な空間バイアスを示すものの一例と言えるだろう。

イニスによると「コミュニケーションの媒体は、時間と空間を超えた知識の散布に重大な影響力を及ぼすものであり、文化的な環境におけるそれらの影響を見積もるために、その特性を研究することが必要になるだろう」と説かれている(Innis 1991, 33)。つまるところ「状況の再編」や「時空意識の拡張」といったようなメディア論的な現象を十全に理解するためには、メイロウィッツが想定した局所的状況だけでは不十分であり、さらに広範な、いわば地政学的ともいえるレベルで、マクロ的な状況の変容についても一考する必要があるのだ。シルバーストーンにいわせれば、「テレビをつける、居間の片隅のお気に入りの場所で新聞をひらく。こうしたことが、すべて空間的な超越(transcendence)という行為の次元を含んでいる」のであり、また「メディアとの関係を通じ、物理的な同一性をもった場所——家(ホーム)——が、地球全体のできことに直面し、地球全体を包み込んでいく」という現象が、現在では至るところで認められるようになっているのだ(シルバーストーン 2003, 35-36)。まさに現代では、電子メディアによる「状況の再編」が地球規模に達していると言えよう。

ところでマクルーハンは「電信は全世界を労働者の朝食のテーブルにもちこんだ」と表現し、電気的なテクノロジーが遠隔的・即時的な情報伝達を地球規模で可能にしたことに論及している(マクルーハン 2003, 103)——彼によると電子メディアとは地球全体をもカバーする「神経系の延長物」のようなものであったが、

その働きによって、人々は口承的な部族社会の諸特徴を「地球村」的なレベルで再び獲得することになると予想されるのだ。このような主張は“速度”の思想家として知られるヴィリリオによっても同意されるところであろう。彼は新時代のコミュニケーション手段に関して次のように述べている。

建築家アドルフ・ロースは、ダーウィンがビーグル号で世界を周りながら作り上げた理論を拝借し、彼の住む土地から遠ざかるほど土着民は進歩から取り残され、より古い時代や先史時代を生きっていると主張していた。しかしこういった「空間と時間の遠近法」は、コミュニケーション技術の加速効果によって無意味になる。いやそれどころか、地上のすべての人々は、地域市民として自覚するよりも、同じ時間を生きる地球市民として自覚する機会が増えるだろう。コミュニケーション技術の発達によって、人々はそれまで属していた隣接空間や旧来の国民国家（あるいは都市国家）空間から、一瞬のうちに特定の場を持たない地球国家共同体へとスライドするのだ（ヴィリリオ 2002, 57-58）。

しかしながら、マクルーハンが語る「地球村」にしても、あるいはヴィリリオが語る「地球国家共同体」にしても、そのような規模で発生する状況融合が固形的な集団意識をもたらすなどとは想像し難いとの反論も存在するだろう。たとえばメイロウィッツは、マクルーハンの「地球村」をメタファーに過ぎないとして一蹴し、オングが認めようとした「強い集団意識」が持続不可能であると主張している。メイロウィッツによると、「電子的情報共有によって作りだされた『集団』は、規模が大きすぎて伝統的な集団凝集を維持できないし、多くの人々を含みすぎているために成員たちに何が自分たちを特別で独特のものにしているかを実感させることができない。メタファーはさておき、国全体や世界全体を自分の『近隣』や『村』と考えるのは不可能である」と言うのである（メイロウィッツ 2003, 263）。このように電子メディアが広範な領域にわたって人々を巻き込む能力をそなえ、既定の状況性を攪乱する要因になりうるとしても、それが地球規模での新たなアイデンテ

ィティの創出を実現するなどとは早急には判断できないという意見もあるのだ。

結語にかえて

ウィリアム・J・ミッチェルは、現代の技術的環境のなかを生きる「私」のあり方を以下のように語っている。

私は、唯一の真円に取り囲まれ、個人的な遠近法の視座から世界を見晴らし、同時に万物の尺度を提供する、ウィトルウィウス的人体〔ダ・ヴィンチが描いた身体図〕などではない。また私は、建築の現象学者にありがちな、周辺環境に遭遇し対象化し反応する、自律的で自己完結した生物学的に統合された主体などでもない。私は、流動的で透明性のある境界および無限に分岐するネットワークと持続的に関与する、相互に再帰的なプロセスの中で、構築し、また構築されるのである。私は空間的に拡張されたサイボーグなのだ（ミッチェル 2006, 60-61）。

人間はネットワークに繋がれることによって「空間的に拡張されたサイボーグ」になる。ミッチェルが抱くこのようなイメージは、これまで本論考で論じてきた人間拡張の問題と無関係ではありえない。

本稿では「外化の技術」によって、あるいはメディア・テクノロジーの延長作用によって、「身体」と「空間」の組成が変容していくプロセスを考察してきた。人類が過去に構築してきた媒介テクノロジーは、その歴史的なプロセスのなかで「外在化」「脱身体化」「装置化」という傾向にそって発達し、われわれの空間のあり方を、あるいは共同性のあり方を大きく変質させてきたのである。

参考文献

- アンダーソン, B. 1997. 『想像の共同体』 白石さや他訳。東京：NTT 出版株式会社。
 ブルデュー, P. 他. 1990. 『写真論——その社会的効用』 山縣熙他訳。東京：法政大学出版局。
 バーク, J. 1995. 「中世のコミュニケーション」『歴史のなかのコミュニケーション——メディア革命の社会文

- 化史』：86-105 頁。デイヴィッド・クローリー他編。林進他訳。東京：新曜社。
- クローリー, D. 他編. 1995. 『歴史のなかのコミュニケーション——メディア革命の社会文化史』 林進他訳。東京：新曜社。
- ドブレ, R. 2001. 『一般メディアロジー講義』 嶋崎正樹訳。東京：NTT 出版株式会社。
- フルッサー, V. 1997. 『テクノコードの誕生——コミュニケーション学序説』 村上淳一訳。東京：東京大学出版会。
- フランク, L. K. 2003. 「触覚的コミュニケーション」『マクルーハン理論——電子メディアの可能性』：186-201 頁 マーシャル・マクルーハン他編。大前正臣他訳。東京：平凡社。
- ゴフマン, E. 1974. 『行為と演技——日常生活における自己呈示』 石黒毅訳。東京：誠信書房。
- ハヴロック, E. 1995. 「ギリシャの遺産」『歴史のなかのコミュニケーション——メディア革命の社会文化史』：64-75 頁。デイヴィッド・クローリー他編。林進他訳。東京：新曜社。
- Innis, H. A. 1991. The Bias of Communication. Toronto: University of Toronto Press.
- イニス, H. 1995. 「古代帝国のメディア」『歴史のなかのコミュニケーション——メディア革命の社会文化史』：31-44 頁。デイヴィッド・クローリー他編。林進他訳。東京：新曜社。
- マーヴィン, C. 2003. 『古いメディアが新しかった時——19世紀末社会と電気テクノロジー』 東京：新曜社。
- マクルーハン, M. 1986. 『ゲーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』 森常治訳。東京：みすず書房。
- . 1987. 『メディア論——人間の拡張の諸相』 栗原裕他訳。東京：みすず書房。
- . 2003. 「メディア・アフォーリズム」『マクルーハン理論——電子メディアの可能性』：101-104 頁 マーシャル・マクルーハン他編。大前正臣他訳。東京：平凡社。
- マクルーハン, M. 他. 1995. 『メディアはマッサージである』 南博訳。東京：河出書房新社。
- メイロウィッツ, J. 2003. 『場所感の喪失——電子メディアが社会的行動に及ぼす影響』 安川一他訳。東京：新曜社。
- ミッチェル, W. J. 2006. 『サイボーグ化する私とネットワーク化する世界』 渡辺俊訳。東京：NTT 出版株式会社。
- 水野博介. 1998 『メディア・コミュニケーションの理論』 東京：学文社。
- 室井尚・吉岡洋. 1993. 『情報と生命——脳・コンピュータ・宇宙』 東京：新曜社。
- オング, W. J. 1991. 『声の文化と文字の文化』 桜井直文他訳。東京：藤原書店。
- リースマン, D. 2003. 「口頭と文字のコミュニケーション」『マクルーハン理論——電子メディアの可能性』：266-281 頁 マーシャル・マクルーハン他編。大前正臣他訳。東京：平凡社。
- 椎野信雄. 1991. 「ドラマトウルギから相互行為秩序へ」『ゴフマン世界の再構成——共在の技法と秩序』：33-64 頁。安川一編。京都：世界思想社。
- シルバーストーン, R. 2003. 『なぜメディア研究か——経験・テキスト・他者』 吉見俊哉他訳。東京：せりか書房。
- トゥアン, Y.-F. 1993. 『個人空間の誕生——食卓・家屋・劇場・世界』 阿部一訳。東京：せりか書房。
- ヴィリリオ, P. 2002. 『情報エネルギー化社会——現実空間の解体と速度が作り出す空間』 土屋進訳。東京：新評論。
- 吉見俊哉. 1994. 『メディア社会の文化社会学』 東京：新曜社。